To LOVEる~古手川唯時間停止~

筆先文十郎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通り古手川唯に時間停止をかけて犯す官能小説です。

催眠追加。

目　次

Ｔｏ　ＬＯＶＥる～古手川唯時間停止～ ―――――――――― 1
Ｔｏ　ＬＯＶＥる～古手川唯、催眠フェラチオ指導～ ―――――――――― 7
古手川唯～催眠強制胸愛撫奉仕～ 13
Ｔｏ　ＬＯＶＥる～古手川唯、催眠手コキ＆フェラチオ集団射精～ ―――――――――― 21
Ｔｏ　ＬＯＶＥる～古手川唯，催眠体罰オナニー～ ―――――――――― 27

To LOVEる～古手川唯時間停止～

夕刻。部活動をしている生徒が活動を開始している時間。

一人の男が風紀委員室の前に立っていた。少し猫背気味の中肉中背。服装もシャツが一部出ているなど、どこか変な平均より少し下といえる男。それが俺だ。

俺は少しだけドアを開けて中を覗く。

「ですから、風紀が乱れている中、今こそ抜本的な強化週間を実施するべきです!!」

教壇で一人の女生徒が高々と主張する。風紀委員の中で最大の風紀強化推進派、古手川唯だ。力強い声が風紀委員室に響き渡る。彼女の廊下まで聞こえるほど大きな声で熱弁は続く。

背中まで届く黒髪は艶やか。目鼻立ちがはっきりとして凛として勝気な大和撫子だ。スタイルは出るところは出て、締まるところは締まるといった理想的なプロポーションと言える。姿勢はモデルをしているかのようにピンっとしていて、衣服にはほつれや埃など一切なく彼女が自他ともに厳しい性格であることを物語っている。

彼女が風紀委員になってからは学校の風紀が一新した、とは言い難い。そもそも宇宙人やら単純なお嬢様やらが居る時点で風紀は乱れに乱れまくりだ。それでも彼女が風

紀に手を加えるまでと比べれば随分と堅苦しくなった。
学校内では厳しすぎるという不満が上がっているが、彼女は特に気にする様子もなく服装や生活習慣を指導して回っている。悪評も彼女を引き立てる素材となっている。
美人なのにも関わらず誰にも告白されたことがないということは。
ま、これ以上言うのはヤボってもんだな。
そんな堅物な女を屈服させるのが男のロマンというヤツだぜ。
と言っても正面から襲い掛かるほど俺も馬鹿じゃない。だからこれの出番だぜ。
俺は腕時計のあるボタンを押した。
この時計は先祖代々伝わる時計で、見た目は古そうな以外何の変哲もない腕時計だがあるボタンを押すと時間が止まるのだ。
先ほどまで風紀委員室に響いていた唯の美声が止まり、校庭で部活動をしている生徒、廊下で話をする教師。例外なく動きを止める。
腕時計を操作した男以外、動ける者。音を出す者はいない。
カチッと時間が止まったのを確認すると、ノックもせず部屋に侵入した。
中では数人の男女が先ほどまで発言をしていた唯の方へ視線を向けながら止まっていた。
周りと同じように、注目されていた少女も止まる直前の厳格な表情のまま停止してい

る。

目的の女子高生に近づき後ろから胸を揉む。

「ふふふ、これがあの堅物で規律遵守の古手川唯の胸か。本人と違って体は男を誘ういやらしい体だぜ」

服の上からとはいえ、だれも揉んだことがないだろう古手川唯の胸を揉んでいることに何とも言えない優越感に笑みがこぼれる。

もしこれが時間停止をしていなければ、多くの人間がいる前でこのような破廉恥なことはできない。それら全てを排除してこのような状況にしたとしても、間違いなく彼女の鉄拳が飛んで俺の前歯は折れていただろう。しかし時が止められている今の彼女は何の抵抗も示さない。

乳首を集中的にいじると感触が違ってきた。コリッと適度な硬さに変わっていく。

ある程度揉み応えを堪能した後、制服をはだけさせブラジャーを乱暴に取り去る。形のいいおっぱいがプルンと震える。大きさも申し分ない。

今度は服の上からではなく白日のもとにさらされた胸を揉みしだく。誰にも見せたことのない胸を晒けだされているとは夢にも思っていないだろう。

乳首は桜色で大きすぎず小さすぎず、形、揉み応えは柔らか過ぎず、適度に弾力がある。今まで誰にも触らせなかったのが惜しいと思えるほど美しい。と同時にそんな

おっぱいを独占している優越感がこみ上げる。
振れるか触れないかのソフトタッチから胸を根こそぎ奪うかのように力強く揉めあげる。肌がほんのりと桜色に染まり、額から汗が流れ出る。
プルンと揺れるおっぱいを堪能するとスカートに手を入れる。尻の大きさは少し大きいくらいか。俗に言う安産型というやつだ。スカートをめくる。ショーツは白。イメージ通りだ。
ショーツの中に手を入れ、まだ熟れていない尻を鷲掴みする。
淫唇に触ると適度に湿ってきた。先ほどのおっぱいへの愛撫で感じていたらしい。あまりに厳格だから不感症というイメージがあったが中身は女だったというわけだ。
ショーツを下し淫裂に指を入れるとトロトロ愛液が指に絡まってきた。
時間は止まるが肉体への影響は時間停止前の状態なのだ。なぜそうなっているかはわからない。しかし俺にとって好都合である以上その理由など考えるだけ時間の無駄だ。それより目の前の情痴に集中したいというのが本音だ。
真剣な顔のままこんな破廉恥なことをしているとは夢にも思うまい。
そんなことを思いながらショーツを脱がせ、たぎる肉棒を唯の蜜壺に入れた。ズブズブと膣道に肉棒が割って入り、止まる。それが何かはわかる。処女膜だ。
ブチッ！

力任せに突貫する。一瞬で処女膜を破る。本来ならば痛がる女性にやさしく腰を動かし慣れるのを待つのだろうが、俺はお構いなく貫く。

赤い鮮血が蜜壺から流れ出る。

もし時が動いていたならば痛みで彼女は泣き叫んでいただろうか。だが時が止まった状態では厳しい表情で止まっている。

鮮血を潤滑油に俺は自分の思うがままに腰を子宮が壊れてしまうのではないかと思ってしまうような激しい動きで前後に動かす。古手川の黒髪が大きく揺れ動くのがその凄さを物語っている。抜けそうになるところから一気に根元まで入れる。後ろからおっぱいを揉み手繰る。

彼女の目から涙がこぼれる。おそらく破瓜の痛みに耐えきれずといったとこか。でも俺は優しくなどしない。自分の思うままに腰を振る。肉棒を色々な角度から子宮をこずく。

彼女自身感じているのか、赤い鮮血だけではない液体が、彼女の内腿に流れ伝っていく。

「や、やばい……出る!!」

どぴゅ！　どくどくどく!!

たんまりと堅物女子高生の中に精液を注ぎ込んだあと、唯の制服を整え部屋を後にし

た。ブラジャーとショーツは俺のポケットに入れて。
さて時間を動かすか。
「ですから……!?」
すぐに体の異変に気が付いたのだろう。周りに気が疲れないようにスカートの上から股間当たりに手を置く。
顔を真っ赤にしたがそれでも気丈に紙面を読み上げる。
そんな様子を声を殺して笑った俺はその場を後にした。

To LOVEる～古手川唯、催眠フェラチオ指導～

藻部山壁男（もぶやまかべお）。高校に通う全体的に平均以下な男子高校生。勉強・運動共に中の下。全体的に肉がついた体型。目元は眼鏡を隠すように前髪が長い。

マンガやアニメなどで主人公たちの周りにいる、三枚目の男子生徒だ。

ただ彼には普通の男子生徒と違うところがある。それは性的興奮が人一倍あること。その欲情は凄まじく、催眠術や人間の脳などを独自に勉強して催眠導入機を作ったほど。彼の作った催眠導入機は一高校生が作ったとは思えないほど強力で、藻部山は催眠導入機で数多くの女性を操り、自分好みの性奴隷に変えてきた。

そして、また一人。汚れなき美少女に狙いを定める。

藻部山が目を付けたのは古手川唯（こてがわゆい）。風紀委員の一人で、問題児があふれる高校で風紀を一新しようと躍起（やっき）になっている女子生徒だ。

黒髪で罵られたいマゾヒストが好みそうなキリッと吊り上ったきつい目。

身にまとう服は少しもよれておらず猫背とは無縁のピンっと伸びた姿勢は、彼女の生真面目な性格を物語っている。スタイルも周りにいる女子生徒と比べると良いのがわかる。

そんな彼女を自分の物にしようと思った藻部山は準備を進めていった。

そんなある日。藻部山は古手川唯にエロ本を持ってきたのを発見されてしまい、放課後。風紀委員室に呼び出された。

「どうして貴方は学校でこのような物を持ってくるの!?」

唯は目を吊り上げ、声を上げる。風紀指導室に怒声が響き渡る。

「別にいいじゃないですか、たかがエロ本でそんな興奮することないでしょ?」

その一言に、唯の全身が怒りでゆでダコのように真っ赤に染まる。

「た、たかがエロ本ですって!!貴方、自分が何をしたのかわかってないの!?」

「そうだ、どうせ興奮するならこっちの興奮にしましょうよ、性的な興奮を」

「はぁ!?貴方何をバカげたことを……」

その言葉にこれ以上ないほどに顔を真っ赤にさせるほど怒り狂う唯。そんな唯に藻部山を観察する余裕はなかった。もしまだ彼女の中に冷静さが少しでも残っていればとっさに手で光を遮(さえぎ)るなどしていたかもしれない。しかし怒りで冷静さを失った唯は藻部山が作動させたスマートフォンの催眠アプリの光を見てしまった。

「……」

瞳から光が失われ、唯は糸の切れた人形のようにその場に立ち尽くす。

「古手川唯さん。僕の声が聞こえますか?」

「はい……聞こえます……」

先ほどまで勝気な目をした瞳からは光が消え、生気を失ったように唯は立っている。途切れ途切れに返答する少女が風紀の乱れを許さない少女だとは、見知らぬ人間にはわからないだろう。

そんな唯を嘲笑(ちょうしょう)しながら藻部山は耳元で囁いた。

＝＝＝

「貴方、学校に必要な物は以外持ってこない。これは常識でしょう？なんでそんなこともわからないの!?」
「す、すみません……」
唯は説教に藻部山は心で舌を出しながら形では反省してシュンとなる男子生徒を演じる。
「まったく」
唯は重い溜息をつく。その後、彼女は普段の堅物風紀委員である古手川唯から考えられない言葉を恥ずかしがることなく言い放つ。
「悪いけどエロ本を学校に持ってきた違反者には〝手コキとフェラチオによる口内射精をして更生を促す〟という罰則があるの。これから貴方にはフェラチオを受けてもらうわ」
普段の彼女なら決して言わない破廉恥なセリフを臆面もなく言うと、唯は藻部山の前に跪くとファスナーを下ろして熱くたぎっていた肉棒を取り出す。
「あ……」
性交など侮蔑する対象だと考えている堅物の美少女が自分の肉棒を触っている。その事実に藻部山は思わず声を漏らしてしまう。
「だ、大丈夫!?」

心配そうに顔を上げる唯に、は「大丈夫です」と答える。
「そう？じゃあ続けるわね。これも罰則だから悪く思わないでね」
唯は目の前の男子生徒の様子を窺いながら肉棒をゆっくり上下に動かす。
「あ、熱い……」
肉棒の熱さに声を漏らす唯だがそれでも肉棒を離すことなく手を動かしていく。
「凄く硬くなっているわね。血管がこんなに浮き出て……亀頭からもカウパー液が染み出ている……」
肉棒を冷静に観察する唯は手に着いた先走り汁を舌で舐め取るとピンク色の亀頭に鼻を近づけ、スンスンと匂いを嗅ぐ。
「それじゃあ……舐めるわよ！……じゅるじゅる、レロレロ……！」
灼熱の強直を口内で舐め根幹に舌を絡めてくすぐり擦りつける。頬を窄(すぼ)めて顔を前後に振り根元まで頬張る。真面目な表情で肉棒を咥えるその姿は、破廉恥極まりないことをしているにも関わらず風紀委員としての責務を全うしようとしているという決して相容れないものが矛盾なく融合していた。
「じゅる……じゅぼっ、じゅぼぼぼ、じゅるじゅるっ！」
激しく顔を振りフェラチオに励みつつ藻部山の反応を上目遣いで窺う。厳格な風紀委員が見せる妖艶な女の顔にギャップを感じた藻部山の興奮は否応がなく高まってい

く。そして
「で、出るぅ！」
びゅる、ぶびゅびゅびゅるっ！どぶっどぶっどぶっ!!
剛直から牡汁が放たれて、唯の口内にこれでもかと流れこんでいく。
「んっ!?んぐっ!!……んんっ……!!」
口内で爆発した白濁液を唇の端をギュッと結び、一滴も外に出さないように飲み干す唯。
それでもあまりの量に口の端から漏れ出る。
「んんっ、れろ、れろ……チュパッ、れろ、れろ……」
唯は口の中の精液を嚥下した後、指でこぼれた白濁液をすくっては舐め取っていく。
「んんっ、濃い精液……喉に絡みつくわ……ん、んんっ……ゴクンッ！」
舐め取った精液を喉に集め、唯は少し苦労しながらも吐き出された精液を嚥下した。
「もうこれからはエロ本なんて持ってこないこと。また持ってきたらまた指導させてもらうわよ、いいわね」
「はい、わかりました」
破廉恥な行為をした唯が真面目に言う姿に、藻部山は笑いを隠しながら答えた。

古手川唯～催眠強制胸愛撫奉仕～

放課後。風紀指導室。

「どうして貴方はまた学校にこのような物を持ってくるのよ!?」

唯は目を吊り上げ、声を上げる。風紀指導室に数日前同様、艶やかな黒髪を背中まで伸ばした少女の怒声が再び響き渡る。

「別にいいじゃないですか、たかがエロＤＶＤなんて健全な高校生なら１００個や２００個待っているものですよ?」

その一言に、唯の全身が怒りでゆでダコのように真っ赤に染まる。

「え、エロＤＶＤを１００個や２００個ですって!?　……ハレンチな!!　というより、学校にそんなものを持ってくること自体が違反なことでしょう!!　……って高校生がそんなもの持っていること自体ハレンチよ!!」

「怒った顔も可愛いですね」

「あ、ありがとう……じゃなくて!!　貴方は人の話を……」

怒りと恥ずかしさで顔を濃いピンク色に染めながら怒る唯を見ながら、スマートフォンの催眠アプリをポケットの中で起動させると、再び唯の前に催眠アプリを見せた。

＝＝＝

「悪いけどここまで酷い貴方には奉仕活動をしてもらうわ。罰則として」
そう言うと藻部山に暗示をふきこまれた彼女は、普段の古手川唯から考えられないことを言いだす。
「これから貴方には私の胸を愛撫してイカせてもらいます。いいですね！」
「わかりました」
藻部山は笑みを浮かべながら歩み寄ると背後にぴったり密着した。
両脇の下から手が渡らすと、開いた十本の指で胸元に張り付き制服ごと乳房を揉みしだく。
（ほう、これは）
顔を見られないことをいいことに、堅物風紀委員の胸の感触に藻部山はニタニタと下碑た笑みを浮かべる。
服の上からとはいえ掌でも掴みきれない大きさ、そして制服の上からでも綺麗なバストを保ちながら適度な柔らかさを感じることが出来たからだ。藻部山はそのまま握りしめては離す動作を繰り返し乳肌を伸縮させるように動かしていく。
「どうでしょうか？」
マッサージをする整体師のように藻部山は尋ねる。
「ふん、こんなので奉仕になると思っているの？」

「ならばこれでどうでしょう？」
　藻部山は下乳に掌を張り付かせ、乳房の底から全体を揺するように強弱をつけながら揉む。
「あぁ……」
　その振動が乳房の内部をかけるジーンという重いむず痒さを残していく。
「少しは様になったようだけど、こんなので許されると思っているの？」
「おっとまだこれからですよ　」
　藻部山は底から揺さぶりと胸揉みを交互に行い乳房を責め立て始めた。
　乳肉をひしゃげさせられたかと思えば乳房な内部から揺さぶられる。
「あ、あぁ……っ、これ……」
　胸揉みでは乳房の表層に、胸揺すりでは乳房の内部にほの甘い痺れが染みわたり、唯の中で快感が徐々に蓄積されていく。
「はぁ、あぁ……あぁん……っ！」
　しつこく責められているうちに乳房が火照り甘い痺れが濃くなってくる。それに比例して堅物風紀委員の口から熱い吐息と共に甘い嬌声がにじみ出る。
「では直接触らせてもらいますよ」
　藻部山はボタンを外し、服の中に両腕を入れた。ブラのホックを外して剥(は)いだ途端、

むっちりと美しい形を作り出す。解放された唯の胸は、小さすぎず、大きすぎず、理想的な形。ツンとわずかに上向き加減、桃色の乳頭。もしこの場に男子生徒がいたらその者の視線をこれでもかと惹きつけていたと思われるほどだ。

そんな生まれたままの瑞々しい乳房を藻部山は鷲掴みする。

「あんっ、む、胸が……あぁんっ！」

布越しで揉まれていた時と違い、今度はダイレクトに指が乳房に食い込んでくる。火照る乳房にピリッという快感電流が走り、唯は思わず背中を仰け反らせ上ずった声を上げた。足を絡ませ背中に胸板をグイグイ押し付けながら、藻部山は堅物風紀委員の乳房を下から上へと捏ね、ギュッと握る。

「どんな感じですか？」

「あぁ、いいわ。どんどん熱くなって……」

声を震わせて唯は返答する。

「それじゃあ次はこちらに奉仕させていただきますね」

藻部山は勃起していた乳首に指を伸ばすと弾力を確かめるように揉み、一本の指でコロコロ転がし人差し指の腹で乳輪ごと乳房をめり込ませる。

「くぅ、あぁん……乳首が、あぁんっ！」

乳首の根元に甘い電気が走り唯は身体をビクッと震わせる。

「それでももっと気持ちよくなってもらいますよ！」
そう言うと藻部山は片手で乳房を揉み、片方の手で乳首を転がしていく。
胸を揉み執拗に乳首を刺激され、普段の自分なら「ハレンチ！」と否定している行為がもたらす感覚が、乳房と乳首でどんどん膨れ上がり、同時に唯の頭の中を真っ白にしていく。
「どうでしょう、僕の奉仕は？」
「あぁん！　いい、いいわぁ！　……胸も乳首も気持ちいいのがいっぱいで……あぁんっ！　すごく体も熱くなって！　ああっ!!」
唯と密着する背中や尻、太ももが快感でビクビクと痙攣を起こしているのを感じ、藻部山は悪魔のような満面の笑みを浮かべる。
「あぁ、もう私！　……わたしぃ!!」
そんな笑みを浮かべていることに気づかない唯は迫りつつある感覚に思わず目を瞑る。
いじられる胸だけではなく身体に細かい汗が浮かび制服の中が急速に蒸れ、心臓の鼓動が早くなり吐き出される呼気は熱く、重くなっていた。その時だった。
「きゃん!?　あぁ！　あぁんっ!!」
唯は突然甲高い声を上げる。

乳首と乳房から快感を与えながら、藻部山は唾液たっぷりの舌で唯の白いうなじをレロレロと舐めしゃぶってきたのだ。
「はぁ、あぁっ……はあんっ！　……はぁっ、はぁっ……くぅんっ!!」
熱い舌のぷりぷりとした感触が這い回り、細かい汗の浮いた美肌に生暖かい吐息がハアハアと吹き付けてくる状況に、最初は驚いた唯だったが次第に乳房の中で荒れ狂う快感の奔流に我が身を委ねていく。
「ぶじゅぶじゅ！　美味しいですよ、古手川さんのうなじ」
音を立ててうなじを吸いながら、藻部山はコリッと充血した乳首を乳房の内部へ強くめり込ませた。その瞬間
「あぁ、い、イクッ……イクイクイクッ!!　あああああぁぁぁぁぁぁっっっ!!!!」
鉄砲水のように一気に襲い掛かってきた快感に、唯は背筋がのけぞらせた。乳首を押さえられた胸がはしたなく前突き出る。スカートの中から絶頂の証が冷たい床に熱い滴をこぼしていく。
唯は涎を垂らし虚ろな表情で天井を見ていた。そんな淫靡な彼女の姿を後ろから観察して堪能する藻部山。ふと時計を見る。
「もうこんな時間か」
全員下校の時間が近づいていた。藻部山はもっとしたい衝動を抑えつつ朦朧として

いる唯の服を元通りにする。
　自分自身に快楽はなかったものの、藻部山は満足だった。堅物風紀委員の古手川唯を操り、絶頂させたという征服感と達成感があったから。
「さて。今度はどんな指導や罰則をしてもらおうかな」
　前回同様、唯にお説教と小言をもらった藻部山はニタニタと笑いながら誰もいない通学路を歩いて家へと戻って行った。

To LOVEる～古手川唯、催眠手コキ＆フェラチオ集団射精～

「……」

「さて。今日はどんなことをさせようかな」

誰もいない廊下で、藻部山壁男（もぶやまかべお）は古手川唯（こてがわゆい）に暗示をかけていた。

「う～ん、お、そうだ！　たまにはこういう趣向もおもしろいかもな」

ある考えを思いつくと、藻部山は虚ろな目をしたまま立ち尽くす堅物美少女風紀委員の耳元で囁（ささや）いた。

＝＝＝

唯の驚きの発言に、校則違反を犯して風紀指導室に連行された男子生徒三人が素っ頓狂な声を上げた。

この異常とも言えることが行われた要因は、昼に藻部山がかけた暗示によるものだった。

藻部山が唯にかけた暗示。それは以前かけた『エロ本を学校に持ってきた違反者には〝手コキとフェラチオによる口内射精をして更生を促す〟という罰則がある』というものを『違反者には〝手コキとフェラチオによる口内射精をして更生を促す。射精しても肉棒が屹立しているということは反省していないということであるため、精液が枯渇するまで射精を促すこと〟』と書き換えたものだった。

「さあ、早く並びなさい！　貴方達にはしっかりと反省してもらうんだから！」

そう言って唯は混乱する男子生徒達を一列に並ばせると自らジッパーを下げ、固くなった肉棒を取り出していく。

「それじゃあ始めるわよ。しっかりと反省しなさい！　……ん、くちゅ、ちゅぱっ！」

一人の男子生徒の前に跪くと、唯は男子生徒の顔を見ながらパクリと亀頭を咥えこんだ。

激しく顔を振り、陰茎に吸い付き、舌を回す唯。先端を舐められた男子生徒は「あぁ……」と小さく声を漏らす。

ぐぼっぐぼっぐぶぶっ！

頬を窄(すぼ)めて根元まで頬張るほど顔を前後に振り、鼻の下をのばして扱く姿は規律を守り風紀を正すことに邁進してきた風紀委員、古手川唯とは思えない姿だった。

「こ、古手川さん……」

「俺らにも、反省させて下さい！」

堪(たま)らず二人の男子生徒が天を指すまで膨張した肉棒を、フェラチオをする美少女の前に晒す。

「ちゅぷ、ちゅちゅっ……いいわ。時間も迫っているし」

そう言うと唯は左右の肉棒を優しく掴む。かと思うとシュッシュッと大胆に動かし始めた。

「うぅ……あぁ、まさかあの古手川がこんなエロいなんて……！」

「や、やべぇ。もう俺、限界が近ぇよ……！」

「そ、そんなに激しくシゴかれたら出ちゃうよ……！」

このようなイヤらしい行為など絶対にするはずがない美少女が嫌がる様子もなく積極的に

行う姿に、男子生徒の興奮は否応にも高まっていく。

「だったら早く出しなさい！　……じゅぶ、じゅるじゅる！」

顔を激しく前後させながら唇は搾り取るように肉棒を咥え、舌は唾液を擦り込むように亀頭や肉幹を舐め続ける。だからと言って両手に握る二本の肉棒への動きはおろそかになることなく、男子生徒の反応によって動かす手の強弱や速度を射精に導くように調整していく。

「こ、古手川……そろそろ俺！」

「射精（で）ます！　射精（で）ちゃいます！」

「お、俺も！　そろそろ！」

男子生徒達が許しを請うかのような声で懇願してくる。

「んはぁぁん……れろぉ……んふっ、いいわよ。私に、精液いっぱい出しなさい……くっ、じゅう、じゅるっ!!」

唯は喉元近くまで肉棒に吸い付き、両手の肉棒を一層激しく上下に動かす。そして

「「う、ああ、あああぁぁぁっ!!」」

ドピュ、ドピュドピュドピュッ!!

熱い迸（ほとばし）りが口内で炸裂し、左右から白いシャワーが顔や長く艶やかな黒髪に降り注ぐ。

「あぁん……ちゅる、ちゅるちゅる……」

喉奥に直撃する白濁液を、唯は目を白黒させながらも受け止める。口内で射精された

精液をゴクゴクと飲み干すと、降り注いだ生臭い精臭を放つ体液を可愛らしい舌や指で集めては口の中に運んでいく。

「んんっ、んじゅうっ……んくっ……いっぱい、出たわね……」

毅然(きぜん)とした顔つきでゆっくりと舌で転がしながら嚥下する。その姿に男子生徒達の萎えかけようとしていた肉棒が再び力を取り戻す。

「……！　本当に貴方達は!!」

勃起しているということはまだ反省していないという事。

藻部山に植え付けられた暗示によって、堅物風紀委員が修羅のような顔で男子生徒達を睨みつける。

「本当に貴方達は反省の色がないみたいね。……いいわ、反省するまで徹底的に射精してあげるわ！」

そう言って唯は再び男子生徒の肉棒を咥えこみ、両の手で肉棒を握り扱き始めた。

下校時間が迫る頃には男子生徒達は魂が抜かれたように地面に横たわっていた。

「いい。これからはこのようなことがないように気をつけるのよ」

身体が白く染まり、胃の中が白濁液で満たされるまでに射精を促した唯は男子生徒達を無理やり立たせて風紀指導室を後にした。

その手には校則違反常連者である藻部山にみせしめのために見せるためのビデオカ

メラが握られていた。

To LOVEる～古手川唯，催眠体罰オナニー～

放課後。風紀指導室。

「あれ……私、どうしてここにいるの？」

ふっと意識を覚醒させた風紀委員、古手川唯（こてがわゆい）は戸惑った。

（何時なのかしら？）

そう思い時計を見る前に窓の光と活気ある部活動の音がごくわずかなことから遅いことが分かった。

「どうして私、こんな時間にここに？」

いくら唯が風紀委員とはいえ、事情も無しにこの部屋を訪れることはない。

その理由を思い出そうとする唯に答えるかのように、身体の芯に何かが芽吹いた。

「そ、そうだ……私、あの校則違反常習犯の藻部山壁男（もぶやまかべお）を正しく導けていない自分に喝を入れようと思って……」

身体に灯った火のような感覚が広がり、唯は熱い吐息と共に呟いた。

「はぁはぁ……私、どうしたのよ……ハッ！」

ふと胸に伸ばそうとする手を理性の全てを使って止める。

（ちがう、何かが……何かがおかしい……）

彼女の理性が身体の内に起こる欲情を抑えつけようとする。しかし抑えれば抑えるほど身体の奥底の淫熱はさらに唯の身体を熱くさせる。

（どうすればいいの！）

今にも泣きそうな顔で両肩を抱く唯にとある言葉が響いた。

――これから自分がしようとしていることは風紀を正すことが出来ない自分への罰。

なぜ自分の脳内でそのような言葉が響いたのか。それを考える冷静さを、この時の唯は持ち合わせていなかった。

普段の彼女ならばそのような考えなど「ハレンチな！」と一蹴していただろう。しかし服と擦れる感触ですら危険な状態なほど激しい疼きに襲われた唯は、その言葉に乗っかってしまった。

（そ、そう……これは罰……罰なのよ……）

これからすることは自分への罰なのだから触ってもいい。

免罪符によって理性の枷が外れると、唯は大きく脚を開いた。ショーツの中に指を入れる。

「!?　あふぅっ!!」

慌てて手を滑り込ませた結果、指は敏感になっていたクリトリスに触れた。

「くはあぁぁぁっ！　んはぁっ！　あああぁぁぁっっっ!!」
股間から脳内へ駆け抜ける甘美な快感。クリトリスに触れただけで唯は軽く達してしまった。
「あぁぁ……私、私……」
それだけで満足出来るはずもなく、右手はさらなる快感を欲してすでに濡れている股間全体を掴んで、手のひらを押しつけるようにして揉んでいく。
「はぁ、はぁ……ああっ！　んっ……ああぁっ！」
熱い吐息を漏らしながら自らを慰める自分に、唯は驚くがそれ以上に「もっとしたい」という欲求が罰だということを忘れさせる。
蜜がにじみ出る秘口の中へ指を入れるとクチュッという音が漏れた。唯が指の出し入れを始めるとその音は少しずつ大きくなっていく。
「あっ！　ひぃっ！　あぁ！　んはぁっ！　あぁっ！」
それと同時に反対側の手でショーツをぐいぐいと引っ張り、尻と尻穴に刺激を送る。膣内で激しく動く指だけでは飽き足らず、それを受ける腰でも快感を得ようと身体は貪欲に蠢いていた。
（き、気持ちいい……ハッ！　違う！　……これは、罰……罰なんだから!!）
激しく自慰にふける自分を叱咤する。しかし身体はもっと性感を得ようと指先や腰

を動かしていく。
「あふん！　……ち、違う！　これは罰なんだから！　罰なんだから!!　……んはあっ！」
今自分がしていることは自分自身に喝を入れるための罰であってオナニーではない。そう自分に言い聞かせる唯だが、湧き上がる悦びにかき消されてしまう。
そしてクリトリスに触れれば痛みと錯覚してしまうほどの衝撃が彼女を襲う。その強烈な刺激に、脳が痺れて全身がビクンッと震えた。
「あぐっ……！　あああっ！　……んひいいいいいっっっ!!」
股間から大量の愛液が噴出し、床に大きく飛び散った。
「ああああぁぁっっっ!!　……え？」
ふと頭の中でフラッシュバックが起きる。
――これから自分がしようとしていることは風紀を正すことが出来ない自分への罰。
その言葉に唯の頭はとある結論を出す。
「はぁ……はぁ……そ、そうよ。これは私の罰。こんなので終わらせるわけにはいかないわ」
そう言うと唯は再び蜜口の中に指を伸ばした。
「んくうっ！　はぁっ、ああっ……くうっ！」

すでに一度絶頂した蜜口は敏感になっており、自分をいじめようとする唯を陶酔させる。

（下校時間が来るまでオナニーする。それが私の罰……）

思考がドロドロに溶かされた中で、突然浮かんだ義務感めいた考えが唯の頭に浮かぶ。

「そう、罰。これは風紀委員としての仕事を全うしていない自分への罰なんだからぁぁぁっっっ!!」

そう言って叫ぶと、唯は次の絶頂へ向けて指と腰を動かし始めた。

下校時間まで自慰をするという謎の罰を科して自慰に没頭する唯は気がつかなかった。

自分が自慰にふける姿を捉えた隠しカメラが至るところに設置されていたことを。